第十三節　服部左衛門佐と精得館

元治二年四月七日(一八六五年五月一日)、改元されて慶応となった。この慶応改元のことは直ちに所司代松平越中守より江戸に注進されたが、同月十八日(陽暦五月十二日)に至り、江戸幕府に朝廷の詔勅が達せられた。そこで幕府はこの改元を各地に報じたが、長崎奉行所が支配向に対してこれを達したのは五月十七日(陽暦六月十日)であった(「慶応元年、文書科事務簿、手頭留、服部左衛門佐在勤、公事方」)。この達を発した頃、諸事改革に努力して、幕府の政治的支配を保とうとしていた長崎奉行服部左衛門佐常純は従来の小島の養生所を改称して、精得館と呼ばしめ、養生所掛の人事異動も行い、精得館掛を設け、ボードウィンの援助を得て、新たに分析究理所の設備を整え、ハラタマを迎えた。ボードウィンの進言によって設立された分析究理所は化学・物理学などの基礎科学を教授するところであったが、江戸幕府の政治的・経済的事情は、長崎にのみ医学を研究せしめるために出張費用を支出して人を派遣する余裕もなく、江戸の開成所に研究機関を整備して江戸にかける学問の興隆を計る目的を達成させ得るとも考えられたのか、遂に長崎における分析究理所は廃止の憂目に逢ったのである。次に「慶応元年、文書科事務簿、手頭留、服部左衛門佐在勤、公事方」によって、精得館の人事異動を示そうと思うが、それは慶応元年閏五月二日(陽暦六月二十四日)と同月十三日(陽暦七月五日)に行われている。この年二月五日(陽暦三月二日)、御用所詰であった花和源次が御用所詰を免ぜられ、養生所方の詰切を申渡されていたが、四月六日(陽暦四月三十日)に至り、養生所掛と御用所掛詰の兼務を申渡され、公事方掛・市中定廻りの当分助は免ぜられた。又、腰高秀三郎は四月五日(陽暦四月二十九日)に養生所并びに御用所掛を申渡されていたが、同

日、市中定廻并びに書物掛を命ぜられていた伊藤直三郎が閏五月二日(陽暦六月二十四日)に精得館掛を申渡され、公事方掛市中定廻り・書物掛を免ぜられたのと同時に腰高秀三郎の精得館懸りが免ぜられ、伊藤直三郎と代って、公事方掛市中定廻り、御用所詰の兼勤を申渡された。

さて、閏五月十三日(陽暦七月五日)に至り、前記花和源次は居留場掛を申渡され、精得館・御用所掛は免ぜられた。又、四月五日(陽暦四月二十九日)以来、市中定廻并書物掛を命ぜられていた今井由郎は閏五月十三日に公事方掛を免ぜられ、書物掛はこれまでの通り勤めさせたまま、居留場掛に転じた、花和源治の後任として精得館掛を申渡された。

この長崎奉行所の任免文書はすべて「慶応元年、文書科事務簿、手頭留、服部左衛門佐在勤、公事方」に見えるが、一方、四月十日、町便を以て、服部左衛門佐常純は「長崎精得館内分理究理所教師手伝御雇之儀蘭医ホードイン申立候義ニ付再応申上候書付」を幕府に進達しているが、これらによつて、精得館改称の時期が慶応元年四月上旬(六日より十日までの間)、即ち、慶応改元の頃と決定できるのである。

ここに、文久元年に設立された養生所並びに医学所と、慶応元年に設立された分析究理所とは統一した組織のもとに経営されることになったのであり、その最も主体となっていた養生所を精得館と改称しただけで、医学所及び分析究理所等の附属機関をも含まれていたのである。勿論、後年、医学を学ぶため長崎に派遣される学生に対する文書に医学所と明記したものがあるが、これは当然、精得館の中の医学所の意であろう。即ち、奉行所の文書中に、養生所掛がそのまま精得館掛として見え、精得館掛以外に養生所掛が存在しないのである。

又、この精得館の敷地(医学所、分析究理所を含む)は十一月に至り、長崎奉行所が買上げることとなった。

さて、慶応元年の国内政情は誠に多事多難であった。正月十六日(陽暦二月十一日)、高杉晋作等の挙兵に対して、将軍家茂は長州征伐の途に上り、閏五月二十五日(陽暦七月十七日)には大坂城に入っているが、二月には

第十三節　服部左衛門佐と精得館

筑波山の乱を起した武田耕雲斎等が斬に処せられた。五月には英国公使パークスの来任があり、六月には尼崎に病院を創設して竹内渭川をその院長に任じた。九月には各国公使が大坂湾に廻航し、条約の勅許を強請したのである。そして柴田日向守一行が特命理事官として海外派遣を命ぜられたのもこの月である。翌十月には将軍家茂は朝廷に開港の必要を説き、勅許を乞い、条約締結の勅許を得た。又、外国公使等は長州征伐の遅延と兵庫開港等を詰問して来たが、家茂は遂に将軍職を辞し、慶喜を嗣とすることを朝廷に乞い、一橋慶喜はここに入って将軍輔佐職に就任した。

慶応元年は全く国内、国外ともに多難で、長崎でもそうした政情により甚だしい混乱を来し始めることになった。然しこのような混乱期にあっても、西洋医学に対する幕府の保護は続けられ、江戸の医学所より長崎に留学を命ぜられていた緒方惟準は西洋医学研究のため、オランダに留学することを命ぜられている。緒方惟準の海外留学は医学研究としては第二回目に当るが、これはボードウィンの帰国が決定した時に発令されたものであろうか。次に示すように、文久三年五月に長崎に着任した服部左衛佐は奉行職に在任中、ボードウィンの建白書に従って分析究理所を建設し、基礎学科の教師招聘にも努力を吝まなかったのである。慶応二年一月三十日（一八六六年三月十六日）夕刻、長崎丸に搭乗して江戸へ参府した時もこうした医学教育に関する報告をなしたものと考えられる。池田謙斎は当時を回顧して「生理と眼科の講釈が済だ時分、ボードウィンは帰国することになったのじやが、ボードウィンはいつも人に向てこんなことを云ってゐた。一人位の教師では、とても医学全科を教ゆるさへ困難である。況や医学を修めるには、其基礎として理化学は勿論、動植物から鉱物学も心得ねばならぬのに、是等普通教育を施す中学校さへ、まだ日本にないのだから、愈々困難である。だから少なくも今一人位の教師は是非共傭聘せねばならぬとの意見を漏してゐたので、当時の奉行で有名な服部といふ開けた人が居たを幸、ボードウィンが右の意見を建白書にして差出し、戸塚などが

それを説明した結果終に之れが容れられてボードウィンの帰国と共に其代りとしてマンスフェルドとそれから理化学以下の教師として更にガラトマンといふ都合二人の傭教師が来ることとなった。此ガラトマンといふのは矢張医者であったが、物理学と化学には最も得意の学者だったそれから此人々のまだ来著しない以前に、矢張ボードウィンの考案で、化学と物理学の教場が新に建てられたと云う風。随分本気にやる積りじやったのだ。私共もマンスフェルドが来てから本当に医者に成れるかと思った。」と述べている。なお、文中のガラトマンはハラタマである。